

保育者になるための読書案内

これから社会に出て、仕事に就く人のために

2018



横浜女子短期大学図書館

まえがき

これから保育者になったり、社会に出て行くみなさんにとって、大切なことは、自ら考え、行動する力を養うことではないでしょうか。こうしたことは、案外見落とされがちです。それは、当たり前だと思われるからです。

しかし、少しでも時間があったら、本当に当たり前のことなのかを考えてみるとよいのではないのでしょうか。ついでに、そんなことをどこかで習ったことがあるかどうかについても。

もし、そうした経験がなかったとしたら、自ら考え、行動する力というスキルは、自分で切り開いていかなければなりません。そのときに、どうしたらよいでしょう？

読書だけがその役に立つ、などとは言いません。でも、これから先、社会人となり、自分で何かをしなければならなくなったとき、相談相手になってくれるのではないのでしょうか。だって、本は、あなたがたの先達によって書かれたものですから。次のような構成を考えてみました。

第1部 保育者になるための読書案内

ここには、先生方からのメッセージが収められています。みなさんが、これから保育者になったり、社会人になるときの参考になるような本が紹介されています。いつでもいいです。ぜひ、手にとって、目をとおしておいてみてください。

第2部 いつでも、どこでも、どんなときでも、あなたのそばに、本を

ここで紹介する本は、教科書のようなものでも、また、娯楽のための本といったものでもない、中間的なものです。これらを読むことによって、人間形成の基礎をつくることになるのではないかと、人とかかわる仕事に就くための一助となるのではないかと考え、2017年度の読書会で取り上げた本から選びました。本について話をするって楽しいよ、というお誘いです。



第1部 保育者になるための読書案内

倉橋惣三『小さな太陽』(フレーベル館 2011)ほか

亀谷美代子

倉橋惣三・ことば 大豆生田啓友・撰／小西貴士・写真『小さな太陽』(フレーベル館 2011)

この本は、ポストカードブックです。16枚の子どもの写真に倉橋惣三が著した「育ての心」の詩的な言葉が添えられています。「小さな太陽」というタイトルは、「天の太陽は雲につつまれる日があっても、ここの小さな太陽たちは、いつだって好天気だ」という文章からとられています。あなたも、保育する中で、たくさんの子どもの表情、仕草、心に出会うことでしょう。そして、『育ての心』も読んでください。

繁多進『愛着の発達』(大日本図書 1987)

著者の繁多先生は横浜女子短期大学の保育センターの研修を長年担当してくださり、多くの保育者に「愛着関係」の大切さを具体的にそして科学的に講義していただきました。

保育がうまくいけなくなったり、理解しにくい子どもに出会ったり、子どもの素敵な可能性に接した時……読んでください。親と子ども、子どもと保育者、人との関係の原点が示されると思います。

時実利彦『人間であること』(岩波新書 1973)

保育している中で、「子どもはどうして…?」「親子って何?」「家族って何?」……と、そして、あなたも含め「人間って何?」と思ったら、読んでください。20億年前ごろから、この地球上に生命が誕生し、その生命の一つとして、人間は他の動物が発生したり、絶滅したりする中、今も歴史を繋げ、文化を生み出し生活しています。いいかえれば「保育」はその一端を担っています。「人間」を知り、「保育」の意味を探る一つの手立てになると思います。

以上は保育の近・現代における保育・幼児教育思想、心理的、生理学的解明から人間の発達の原理と子育てにおける意義を説いています。それに加え松田道雄『定本育児の百科』(岩波文庫 2008) は、昭和 40 年代、当時代表的な各家庭が備えた「育児書」です。保育所、幼稚園での保育の参考書の源になっていた本書が 2007 年にリニューアルされて、文庫本 3 巻として出版され、読まれ続け 2013 年現在第 9 刷となりました。

そして、育児が社会化された現代、2016 年に秋田喜代美監修『あらゆる学問は保育につながる』(東京大学出版会) が出版され、東京大学に「東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター」が誕生しました。本書は前保育学会長の秋田喜代美氏が中心に 10 名の研究者が第 1 部「社会と保育」、第 2 部「発

達と保育」、第 3 部「保育と学問」に著しています。彼等は「子育ては、学問にとって最高難度の研究テーマ、あらゆる学問領域の専門家が結集し、新しい知の地平を切り拓く」とし、「保育」の奥深さを現わしています。

柴田悠『子育て支援が日本を救う』(勁草書房 2016) は、京都大学人間・環境学研究科の准教授が「経済成長率」「労働生産性」「出生率」「子どもの貧困率」「自殺率」などの重要な社会指標に対し、子育て支援など社会保障政策がどのように影響するか統計的に分析し、「子育て支援が日本を救う」という結論を導いています。

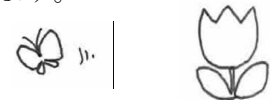


白石正久『発達の扉 子どもの発達の道すじ 上』(かもがわ出版 1994)

佐野 眞弓

この本は、私が保育者だった時そして今でも、とても大事にしている一冊です。再就職してお世話になった園長先生が、「自分の保育に悩んだり躓いたりした時は、子どものことを考えることから道は開けます」と教えてくださいました。そんな時出会ったのがこの本です。子どもの発達を、できたできないでは無く、子ども自らが乗り越えていく一歩前をいく活動と捉え、乗り越えていく葛藤を支え励ます大人のあり様とありのままの子ども姿を通し書かれています。落ち込んだ時はこの本を読んで、「そうだ

目の前の子ども一人ひとりを大切にしていけることが私の仕事」と思ってきました。皆さんも、自分の保育に悩んだり落ち込んだりしたら、ぜひ読んでみてください。著者自らが撮影した子どもたちの生き生きとした目とかわいい表情の写真と、まるで講演でも聞いているような優しく語りかけるような文章は、前頭葉に染入る様な心地よさが感じられます。



津守真『保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－』(ミネルヴァ書房 1997)

本田 幸

津守真『保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－』(ミネルヴァ書房 1997)

著者の津守真先生は発達心理学の研究者として、長年にわたり子どもの研究をされてきた方です。この『保育者の地平』は、著者が 1983 年から 12 年間、愛育養護学校の校長として保育の場で、実践者として子どもとの関わり、保

育をしてきた体験に基づいてまとめられた本です。ご自身の保育者第 1 日目から、12 年間の保育者としての実践が書かれています。5 年目からは、担任も経験されています。この本を通して保育者にとって大切なのは子どもと過ごす「いま」であるということを強く教えられます。さらに、保育を実践する上で子どもを理解す

ることの難しさや担任としての悩みなどにも触れられています。そのような意味でこの本は保育論であり、保育者論でもあります。私は、保育は、言葉や理論で表現されるほどに簡単ではなく、実践することは本当に難しいことであると常々思っています。これから、保育の道を歩もうとするみなさんが、何かの時に思い出していただければと思い、紹介させていただきました。

吉村真理子著・森上史朗 [ほか] 編『保育実践の創造－保育とはあなたがつくるもの－』（ミネルヴァ書房 2014）

本書は、著者吉村真理子さんの 35 年にわたる保育の実践記録を、改めて復刊したものです。30 年以上前の記録にもかかわらず、そこから学ぶことはたくさんあります。それは、著者吉村氏が保育という仕事に正面から向き合い、保育の面白さ、奥深さを感じながら仲間とともに保育をつくり上げてきたからではないかと思えます。吉村氏は「保育をするよろこび」からの出発が大切であると述べています。この本には、著者が保育の中で困難な場面に遭遇した時、それを知恵と工夫と仲間同士の協力（協働）で乗り越えてしまう事例が書かれています。そこには著者が、前向きに、真摯に、時にユーモアも忘れずに保育に取り組んできた姿勢を感じ、私自身多くのことを学びました。この本の、「－

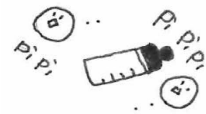
保育とはあなたがつくるもの－」という著者からのメッセージは、いつまでも私に残るものとなりました。

エリーズ・ボールディング著・松岡享子訳『子どもが孤独（ひとり）でいる時間（とき）』（こぐま社 1998）

人には、ひとりで静かに思いを巡らせたり、想像したりする時間が必要な時があります。この本は子どもにとってひとりの時間を“孤独”としてマイナスに捉えるのではなく、その積極的な意味を教えてください。

これから、保育の場で様々な子どもに出会うことと思います。時には園庭の虫をじっと観察したり、友だちの様子を保育室の傍らで見えたり、何かを作ることに夢中になっていたり、ひとりの時間を過ごす子どももいることでしょう。そのような時、保育者として「○○ちゃん、早くお友だちと遊べるようにならないかな」と焦るかもしれません。

子どもがひとりでいる時間も時には必要なこともあるのだというこの本のメッセージを読むと、ゆっくりと子どもの育ちを見守っていこうという気持ちを持つことができます。



市川伸一『学ぶ意欲の心理学』（PHP研究所 2001）

細野 美幸

この本では、「やる気を出す」ということについて具体的に分かりやすく説明しています。第1章では心理学によって「やる気」について説明しています。第2章・第3章では、精神科医の和田誠さん、および、教育社会学が専門の荻谷剛彦先生との対談によって、学際的な視点から「やる気」について討論しています。最後の第4章では、実際に私たちが生活の中でどうやって「やる気」を出していったらいいのかを考えていきます。日常生活では「やる気を出さなくてはいけないけれど出てこない」というこ

とがたくさんあります。その時に、どういう状況を整えればいいのか、どのような気もち方をすればやる気が引き出されるのか、ということを考えるためのヒントが数多く盛り込まれています。

専門用語が使われている箇所もあり、難しく感じるかもしれません。しかし、文体には「～です」「～ます」が用いられ、まるで著者の話を聞いているようで、読み口は軽妙です。子どもたちのために、また、自分自身のために、読んでおいてもらえると嬉しい1冊です。



「おさなごにまなぶ」を生涯、実践した「平野恒」

亀谷美代子『平野恒』「シリーズ福祉に生きる68」(大空社 2015)

元本学教授 兼子 盾夫

児童福祉に生きる恒の姿—『記念樹』の園長のモデル

児童福祉に生きる平野恒の姿は、昭和 40 年から翌年にかけて日本中に感動を与えた、TBS の TV ドラマ『記念樹』に描かれた、厳しくしかも優しい園長の姿そのままである。

恒から聞く実話を元に木下恵介監督が養護施設の若い保母と子ども達の心の交流を一話完結で描き、結婚を機に園を去る保母の家に子ども達が記念の樹を植える、このドラマはその年の「児童文化賞」を受賞した。

平野家の「キリスト教的愛」と「家庭環境」

—恒の生涯を貫く原動力

恒の教えを直接受けた著者は児童福祉とその前提となる保育者教育に捧げた師の 98 年の歩みを読みやすい筆致で「福祉シリーズの一冊」に切り取って見せる。

医師で国会議員の父友輔と日本の最も早い時期の看護師である母藤の第二子として明治に生を受け平成に没した恒の生涯。理想的な家庭環境に恵まれただけ、それは亦「天職」に伴ういくたの試練との闘いの連続でもあった。

恒はクリスチャンで自由民権家の父からキリスト教の根底にある人間の尊厳と隣人愛を、母からは衛生的な家庭環境と保育に必須の小児栄養の知識を実践的に与えられた。これらはそれに欠ける子ども達を前にしたとき、大人の義務・子供の権利として、終生、恒を前進させ、問い続けさせた保育の「原動力」である。

「無鉄砲」の実践としての転機—神への「完全なる委託」

著者は手際よく恒の生涯を何本かの柱をたて、即ち生い立ち、矢嶋楯子・二宮ワカとの交流、信仰のネットワーク、人生の転機と社会事業・児童福祉、そして保育・幼児教育のステージへと纏め上げる。恒の生涯の転機は二度ある。一度目は二宮ワカの推薦で矯風会横浜母子寮の寮長を引き受けたとき。しかしこれは二年を待たず恒を青山学院神学部へと進ませる。それは婦人の更生に根本的な矛盾を感じた故で、負の循環を断ち切るには大人になってからでは遅い、「幼児期の保育こそ人間生涯の人格形成に

一番大事だ」との信念に基づく。そして二度目は敗戦直後、戦災で恒の福祉事業がすべて灰燼に帰したときだ。

思えば恒の人生は大正 12 年の大震災と昭和の太平洋戦争という日本の二度の激動期を生き抜いた波乱の人生である。大震災における平野家の全壊や翌年の父友輔の突然の病臥は恒個人にとって計り知れない不安、苦痛、困難の因となったであろう。しかし天の父しか畏れる者を持たない気丈な恒をも絶望のどん底に陥れたものは終戦直後に直面した人間の忘恩、無情さと社会に充満する利己主義で、どんな愛を与えても裏切りで報いる心無い大人の対応であった。

がしかしこの時は皇后様や秩父宮妃殿下という皇室からの励ましが明治人恒を立ち上がらせた。恵まれない母子の福祉、子供の権利のため自分がやってきた仕事を評価して下さる方々が存在する。子供たちのためにもう一度、立ち上がるのだ。そう思うと恒の行動は素早い。戦後の復興期に大活躍し海外視察、ホワイトハウスの会議にも呼ばれる。その成果を還元し各地で講演する。各種の委員会に委員として加わる。昭和 15 年に創った保母学院を再建し、中村に再建された保母学院は、最終的に学校法人格を得て昭和 41 年横浜女子短期大学(保育科)となった。

「おさなごにまなぶ」を生涯、貫き通した平野恒の生き方を伝えるこの魅力に満ちた伝記には冒頭の平野建次学長の『「おさなごにまなぶ」の思い出』から巻末の「年譜」他に至る迄、恒の血を引く者、教えを直接受けた者、恒を尊敬する者という恒の周囲のすべての人の協力が伺える。

著者は「おわりに」ある如く直接、恒の教えを受けた者だが、その後地方行政にも携わりつねに児童福祉、保育の最前線を歩み、かつて恒の創立した短大で教鞭をとり、今また白峰保育園の園長を勤める保育者である。



第2部 いつでも、どこでも、どんなときでも、あなたのそばに、本を

桐野夏生 『だから荒野』（毎日新聞社 2013）

1. 主婦の出奔

専業主婦の森村朋美は、46歳の誕生日、なにかも嫌になって家を出た。「夜のそこに沈む自由。遠くへ、遠くへ。誰も行ったことのない遠くへ、行ってみたい。」(p.34)。車を出奔したため、取りあえず元彼がいると聞いている長崎にでも行こうかと考える。学生時代の友人知佐子に電話で状況を報告しているうち、「一人で自由に生きたい」(p.39)と考えている自分がいることに気づく。しかしそれは「孤独の荒野に旅立つ」(p.134)ということでもあった。

2. 家族のもろさと強さ

「家族なんてね、実は危うい均衡の上に成り立っているものなんですから。言うなりや、パズルみたいなもんです。一個外れりゃ、成り立たない。そして、二度と元に戻らない」(p.100) 朋美の夫浩光は、妻が出奔した数日後、毎晩のように通うバーで出会った男にこう言われる。それまで、勝手に出て行った朋美に憤りしか感じなかった浩光だったが、急に家族崩壊が目前にあるような気持ちになり、不安になる。朋美は専業主婦として、夫をたてつつ、自分が家族を支えることで、家庭を維持していた。しかしそれは、とても強い精神力と、深い包容力がないとやっていけない。普段は朋美をばかにしている夫や二人の息子も、朋美がいなくなってしまうことで、いままで自分達が朋美に支えられ

ていたことを骨身にしみて分かる時が来る。

3. 人間の魂

朋美は旅先のインターで山岡という老人と出会う。彼は、長崎の原爆の惨状を目の当たりにし、今は長崎や全国各地で原爆の悲惨さを訴えている。山岡は語る。「ずっと考えてまいったのですよ。突然、大勢の人が亡くなるというのはどういうことかを、です。」(p.250)「長崎と広島は、世界でも特別な場所なのです。何度も言いますが、原爆が投下されたことによって、人類の歴史を変える存在になった街なのですよ。」(p.380)。

今年のノーベル平和賞に ICAN（核兵器廃絶キャンペーン）が受賞したことは記憶に新しい。受賞に際して ICAN の代表者は「今回の授賞は、また大きな目標のために力強い証言と惜しみない活動をしてきた広島と長崎の原爆を生き抜いた生存者、いわゆるヒバクシャと世界中で行われてきた核実験の犠牲者への贈り物でもある」とコメントした。この受賞が核との決別となる、1945年とは別の意味での「人類の歴史を変える」出来事となって欲しいと願わずにはられない。そして、長崎で人生を見つめ直し、荒野を沃野に変える決意をした朋美。長崎を訪れる人までも「変える」力がある街であるのかもしれない。(O)

カズオ・イシグロ 『わたしを離さないで』（ハヤカワepi文庫庫 2008）

1. 運命を背負わされた子どもたち

「すべて医学のための存在」として「決められたとおりに終わる」運命を背負わされた子ども（若者）たちが、私たちと何ら変わらない感情を持ち、将来を夢見、恋をし、希望にすがり、やがて絶望する姿が描かれる。彼らは生まれた時から死ぬことを運命づけられている。手術を受け臓器を提供しつづけ、若くして「終了」する、将来の約束はないのだ。そんな生命ってあるだろうか。ヘルシヤムという外界との接触を遮断された施設で育った彼等には、愛情を注

いでくれる親はいない。求められるのは臓器を「提供」することだけ、そのことを通じてしか存在を認めてもらえない。やりきれない物語だ。

2. 真実を語る者は排除されて

必死に生きようともがき、何かにすがら姿は私達と何ら変わらない。彼等は臓器提供のことは「六、七歳の頃からぼんやりと……知っていたような気が」し「何か深い意味がある」と感じていたが、施設でそのことを明確に話題にすることは避けられた。けれどただ一人、「何が待ち受けているか、自分が何者か、何のための

存在か、ちゃんと教えた方がいい」と主張する教師がいた。子どもたちも「ほかの保護官とすこし違う」と感じるルーシー先生は勇敢だ。「ちゃんと教わっているようで、教わっていない」生徒達に真実を説明したばかりに退職に追い込まれてしまう。この施設では、真実を語る者は排除される。

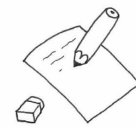
「わたしを離さないで」というタイトルどおり、失われた愛や記憶や未来、真実を求め、つながりをつかもうと懸命にもがく若者たちだが、定められた運命には、皆、抵抗しても乗り越えることはできない。

3. 救った人、救われた人

痛癪持ちのトミー、意地悪く平気で人を裏切るルースとは対照的なキャシーは、子どもの頃からいつも冷静で抑制された感情の持ち主だ。友人二人を見送ったラストでは、自分の存在理

由を見出し使命を受け入れる。「それでいいのだと思います。……どこのセンターに送られるにせよ、わたしはヘルシャムもそこに運んでいきましょう。ヘルシャムは私の頭の中に安全にとどまり、誰にも奪われることはありません。」と、自らの運命を肯定し、かつての思い出は大切なものだと言う。

皆、粘り強く抵抗を試み必死に生きようとしたが叶わず力尽きた。彼等によって救われた人々と彼等は同じ人間であり、懸命に生きた証は引き継がれる。誰もが死に臨めば抵抗を試みるが逃れることはできない。真の生とは何か理解することができないまま、皆生命を終えるのではないか。(H)



原民喜『夏の花』（集英社文庫 2012）

1. はじめに

広島原爆投下後の実録のような小説で、原民喜自身が実際に避難した時系列に沿って書かれている。この『夏の花』の中に「原爆」という言葉は一言も書かれていない。8月3日から13日ぐらいまでが書かれているということもあるが、新型爆弾で広島が壊滅したことは避難している時の対岸の火事や竜巻、火傷などを負いぼろぼろになって逃げ惑う人々やそこら中に倒れている無残な死骸などでわかっていたのだと思う。爆心地付近の光景を「精密巧緻な方法で実現された新地獄」と表現している。

2. 生と死

原の家は爆心地から1.3キロぐらいしか離れていなかったが、『夏の花』の中で被爆した身内は甥の文彦以外は生き延びている。長兄家族、次兄家族と女中、妹と本人、みんな一見無傷だったり、やけどなどはあっても動けないほどの傷を負っていない。いちばんひどかった次兄宅の女中は1か月後になくなっているが、5、6日して帰ってきた甥は生き延びている。避難途中や避難先の東照宮で周りの避難者が次々に死んでいくさまを、感情が麻痺したように淡々と書かれている。文彦の死体を見つけたときも同様で、「涙も乾きはてた遭遇」と書かれている。

3. 交通

原は次兄家族と一緒に行動していたが、長兄は泉邸で別れた後、郊外の妻の疎開先の廿日市町へ行っている。家族の安否確認ということもあるのだろうが廿日市町まで直線距離で15キロくらい離れていて、市電が走れるとは思えない状態だったはずだが、鉄道は動いていたようで、全行程を歩いたわけではないらしい。次男一家と妹と原を疎開させるべく荷馬車を調達し戻ってきている。最後に出てくるNが列車に乗って広島へ戻ってきていることで鉄道が動いていた事がわかる。

4. おわりに

読み終わってみて感じたことは、これは小説なのかノンフィクションなのかという疑問だった。原民喜が逃げた時の実録ノートを基本に妻の墓参りや昔の思い出、最後のNのことなどを足したことで小説になっている。直後からの記録を残さねばならないという思いが話全体から伝わってくる。荷馬車で避難している時の惨状をカタカナで書いている詩に、どこにぶつけていいのかわからない怒りと空しさが感じられる。(T)



1. マンホールだらけの世界

7歳の千秋は、父を亡くし、母と共にポプラ荘に越してくる。父を亡くしてから、千秋はよく眠れなかったり、毎日小学校に行く途中、戸締まりをしたか心配になり、3回くらい行ったり戻ったりする。忘れ物が心配でランドセルはいつも全教科の教科書がつまっている。千秋にとって「この世界はそこらじゅう蓋の開いたマンホールだらけの、少しの油断もならないところ」（p.21）であった。

千秋の母は、千秋に父の話をしたがらない。

「父の死に強い拒否感を抱いているのが、子どもの私にさえわかった」（p.22）。そんな母に甘えてはいけない、父のことは思い出してはいけないと察した幼い千秋は、「落ち度がないよういつも緊張して」おり、「いつどこに現れるか知れない暗い穴に引きずり込まれないようにするには、そうするしかない」（p.22-23）とっていた。頼るべき大人が急にいなくなった子どもの心理状態は、こんな感じなのか。子どもとしては気丈に頑張っているのだが、やはりどこかにしわ寄せがくる。子どもには大人に守られる必要があるということがよく分かる。

2. あの世の郵便屋

そんな千秋に、頼れる大人が現れる。ポプラ荘の管理人のおばあさんだ。千秋はおばあさんのことが怖くて近寄り難かったが、あることを

きっかけに距離が急接近する。そして、おばあさんが「あの世の郵便屋」稼業に携わっていることを知り、日々父への手紙を書き、おばあさんに託すことに夢中になる。

人は、思っていることを文章に書くことで、心が整理され、つらい気持ちが昇華されてゆくというが、子どももきっとそうなのかも知れない。ボキャブラリーが少なく、書ける言葉も限られているが、かえって健気さがあふれ、切なくなる。

3. おばあさんの死

その18年後、おばあさんの訃報を千秋はポプラ荘から離れた場所で聞く。千秋は、25歳になって人生で何度目かの試練に襲われている真只中であった。取るものも取りあえず、おばあさんのお通夜にむかい、そこでまたおばあさんに救われることになる。ラストでは、母がなぜ、父の死に対して向き合えなかったのかの謎も解け、千秋と共にやっとマンホールの世界から抜け出せた気分になった。

本書には、千秋という幼い子どもの目を通して感じる、世界の恐ろしさ、心許なさ、美しさ、心安らぐものごとなどが綴られており、自分の子ども時代も思い出し、とても懐かしい気持ちがよみがえる。 (O)

1. はじめに

読み終わった時の印象としてこの小説の主人公は誰？という疑問があった。語り部の私なのかアヒルののりたまなのか。私の目線で話が進んでいるのできっと語り部の「私」が主人公であるのだと思う。

2. のりたま

生き物を飼うことがへたくそな飼い主の所へ来てしまった代々ののりたまは不運だったのだろうと思う。生き物を飼うのがどうやらうまくない私の両親は、アヒルを見に来る小学生をつなぎ止めるためなのだろう2代目、3代目ののりたまを飼っている。ただし、飼い主である両親

親には飼っているという意識がないのか、ただ単純に飼育が下手なのか、のりたまはすぐに体調不良になっている。のりたまの代替わりに私や小学生たちも気がついていようだが、言及していない。1か月そこそこで元気がなくなるというのは余程のことでは無いかと思う。夜中に鍵を探しに来た男の子(p.38)はのりたまだったのではと私は思っていたようである。

3. 両親

両親はアヒルを飼いたいのではなく、アヒルを見に来た責任なく可愛がる事が出来る子どもが欲しかったのかも知れない。子どもたちを家の中にあげておやつや食事まで出している。

結局誰も来なかったが、子どもたちのお誕生会まで準備しているところは、普通そこまでしないのではと思うほど。弟夫婦に子どもが出来、同居が決まると小学生にはもう興味を示していない。本当に猫かわいがりできる対象が欲しかったのではと思われる。小学生たちは、アヒルはかわいいし、おやつがもらえる便利な場所という認識だったのではないかと思う。

4. おわりに

資格試験を控えた私は積極的にはアヒルの飼育や集まってくる小学生たちにはかかわっていないが、一応気にはしているようだった。私は資格試験に今回も落ちている。何となくのり

たまに引き寄せられた子どもたちを落ちた理由にしている様に感じとれる。そして、次回試験も家のリフォームと弟夫婦が引っ越してくることを理由に諦めているように感じられた。

最近、保険のコマーシャルに出ているアヒルの影響で、ガチョウに比べ小さくて、比較的飼いやすいと今ペットとしてアヒルが人気らしい。鴨を家畜化したアヒルは水鳥で雑食で、水浴びが出来る水場と日光浴、適度な運動をかかさなければ10～20年は生きるといふ。ただし、トイレ・トレーニングが出来ないので、臭くて室内飼いには向いていないとのこと。(T)

林京子『祭りの場』（講談社 1975）

1. 降伏勧告書の疑問

冒頭に東大嵯峨根教授宛ての降伏勧告書が引用されている。長崎に原爆が投下された際観測用ゾンデに収められていたもので「日本国がただちに降伏しなければそのときは原爆の雨が怒りのうちにますます激しくなる」という忠告であり、著者はこの勧告書に対して2つの疑問をもった。

一つは「原爆の雨が怒りのうちに」の部分。8月9日、「73,889人」を殺し、浦上を「万が一の甘えを許さない完べき」さで壊滅させたことを当然の行為として書いていることである。米国の科学者たちに怒る権利がどうしてあるのか。「怒られる理由さえつかめず、明日もあさっても生きるつもりでいた」(p.11)のだから、何故私たちが怒りを受けなければならないのか。二つ目は、広島に続いて落とされた原爆の投下目的地が、明記されていないことである。何故他の候補地(小倉)でなく長崎だったのか。それは明暗を分けたのは雲の厚さであり、戦いの根を断つ目的で選ばれた不幸である。

2. 終わらない被爆

米国は日本より力が勝っていることを前提に、当時この手紙は書かれたのではないか。戦争は、多くの市民の心身に生涯消えない苦しみを宿し続ける。しかし「かくて被爆は終わりました」の一言で一方向的に戦争は終わったのだ。

8月15日、息子を亡くした伯父が、ラジオから聞こえてくる声の主に向かって「なして、もっと早う言うてくれん」と「恨みを言った」り、そのあと、「その人が諫早にやって来た」

時にも、家族が家の外に出ることを禁じたのも「無力な伯父の精一杯の抵抗」(p.81)だった。作者自身もまた同じように「なして、もっと早う言うてくれん。私の終戦の感想もこれだけだ。」(p.83)と述べている。また山で出会った無傷のおばさんが、目の前の惨状を見てもなお「トムライ合戦だ」と戦う気構えを見せる強さに、「これ以上異様な人間がふえるのはおそろしいとわたしは恨めしく思った」(p.51)。人の心を狂わせる戦争で犠牲になるのはいつも私たちだ。

3. 林京子が記し続けた8月9日

林京子は「8月9日のことばかり書く、と言われましたが、私にとって書く意味があるのは、9日のことしかない」と言っている。しかし生かされたことで、大切な人や故郷を失った当時と現在の心のありようを書き記し続けることを使命としたのだ。60年間は草一本生えないとされた被爆地に雑草を見つけた日「私も生きられるのだ、と涙があふれた」(p.53)とある。完べきに破壊された長崎だったが、たくましい生命力までは奪うことはできなかったのである。

タイトル「祭りの場」とは、高等学校の仲間の出陣を送るための無言劇のような踊りのことだ。「大学生も混じり40人、送る者も送られる者もみな死んで犠牲になった」(p.28)と、もの悲しさがわだつ小説だ。(H)



あらためて考えよう 昔ばなしのすばらしさ
おすすめの昔ばなし絵本5選



昔ばなしには、何百年も前から語り継がれ、時代にもまれながら生き残ってきた、おもしろいエッセンス満載のおはなしが沢山あります。

実習で読み聞かせの絵本に迷ったら、昔ばなしを取り上げてみてはいかがでしょうか？ 必ず子ども達の心を惹き付けることができるはずです。

ここではオススメの日本の昔ばなし絵本5冊を紹介したいと思います。

(大久保)

【笑える話】

長谷川摂子文 荒井良二絵『へっこきあねさ』岩波書店 2012

おならが豪快すぎるお嫁さんの昔ばなしは何パターンも存在しますが、ここでは荒井良二さんが絵を手がけたものをご紹介します。荒井良二さんのかわいらしい絵とおかしなお嫁さんのお話がマッチして子ども達もくぎづけになることでしょう。



【こわい話】

水沢謙一再話 梶山俊夫画『さんまいのおふだ』福音館書店 1990

やまんばが小僧さんをとことんまで追いかけるとも迫力のあるお話。緊迫感が子どもを惹き付けます。最後の和尚さんとやまんばのトンチ合戦もみどころ。

【泣ける話】

瀬戸内寂聴文 岡村好文絵『月のうさぎ』講談社 2008

自分の身を犠牲にして大切な人を助けるお話。この仏教における菩薩行という考えは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のカムパネルラに通じています。



【恋する話】

矢川澄子再話 赤羽末吉画『つるにようぼう』福音館書店 1989

動物が恩返しをするお話は、昔ばなしから現代小説まで綿々と受け継がれてきた題材です。最近では映画にもなった『陽だまりの彼女』がそうですね。昔ばなしを知っていると、現代の小説などをより深く楽しむことができます。



【すっきりする話】

木下順二 著 清水崑絵『かにむかし』岩波書店 1976

だれもが知っている「さるかに合戦」。本書は読み聞かせしやすいよう、擬音を豊富に使うなどの工夫がされています。さる退治の場面も、残酷さはなく、子どもが無邪気に楽しめるようにさらっとしています。カップのイラストでおなじみの清水崑さんの絵が愛らしいです。

第2部 T・高橋和子 O・大久保美玲 H・原真由美

保育者になるための読書案内

これから社会に出て、仕事に就く人のために 2018

横浜女子短期大学図書館 2018.03.15